

1 大学・短期大学の基礎情報

(1) 大学・短期大学の特色 (概要) (※800字以内)

本学は看護学の単科大学であるが、専門職（看護師、保健師、助産師）としての資格取得のためだけの教育ではなく、①教育を通して看護学の必須事項を将来に伝承する、②研究を通して看護学に関する新しい事柄を開拓するという大学の使命を果たすための取組を行ってきた。単科大学の利点を活かし、学生と教員のお互いの顔が常にみえる大学運営を目指している。

教育目標として、

- ①ヒト、人、人間を総合的に理解できる能力の育成
- ②自ら考え、判断できる自律的な能力の育成
- ③心豊かな感性、社会的適応性の育成
- ④国際的視野の育成

を設定し、学生が看護学に魅力を感じ、生涯の職業として看護職を選択したことに自信と誇りを持つ教育を目指している。

教育目標達成のために、①人間科学講座、②基礎看護科学講座、③専門看護学講座、④広域看護学講座の4つの大講座（16の科目群）を設置し、各科目群間の連携を図りつつ、大学教育を専門職としての生涯教育のスタートと位置づけた教育を展開している。4年間で、専門的な知性と人としての感性を育成するためには、看護学に対する動機付けを早い時期に行い、積極的に学習に参加する姿勢を涵養する必要がある、1年次生から看護学実習をスタートさせ、さらに一般教養科目と看護学の専門科目を1～4年次の全学年に配置（4ページの図）し、卒後の生涯教育への継続を図っている。

国際的な視野を育成するために、海外の4大学と開学以来実質的な交流を図ると同時に、開発途上国の保健指導活動に学生も参加させ実体験の場を提供している。

学生が大学にとって大切な一構成員であることを自ら認識できるように、教員一人と6～7人の学生からなるグループ（コンタクトグループと呼んでいる）を作り教員と学生、異なる学年の学生同志の交流の場とし、公開講義、サークル活動なども地域の看護職、地域住民との積極的な交流の場となるようにしている。

(2) 大学・短期大学の規模 (平成15年5月1日現在)

学部等名、研究科等名または 学科名	学科（課程）数、専攻数	収容定員数	在籍学生数	専任教員数
看護学部 看護学科	1	340	329	53
大学院 看護学研究科 看護学専攻 (修士課程)	1	12	11	(24)
合計		352	340	53

注) 大学院看護学研究科の専任教員24名は、全員看護学部との兼担。

2 取組について

(1) 取組の内容について (概要)

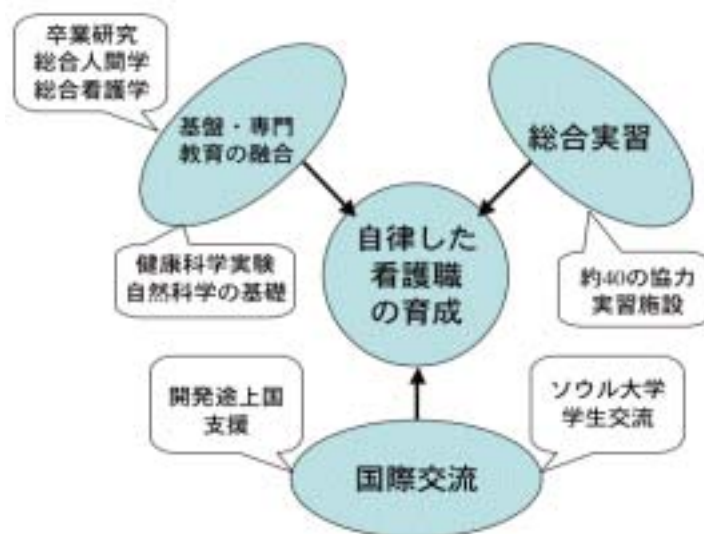
21世紀の看護職に求められる知識や技術はますます高度化・専門化していくことは間違いがない。自らの感性を高め、自ら考え、自ら知識や技術を切り拓いていく能力を持つ自律した看護職の育成を目標とする教育プログラムを確立していくことが看護系大学の大きな課題であると考え、種々の取組を行っている。その中でとくに、全学をあげて取り組んでいる特徴的な事項は以下の3点である。

一般教養教育、看護学の基盤教育、看護学の専門教育の融合
自律性を育成するための看護学の総合実習
国際的視野を育成するための国際交流

自律的に取り組めるようにするための教育の骨格となっているのは、**一般教養教育、看護学のための基盤教育および看護学の専門教育**の3つの有機的な融合である。それぞれの科目が独立・分離したものでないことを学生に理解させ、自律した看護職を育成するための教育として1年次から4年次までのすべての学年に3つの教育を有機的に配置している(4頁の図)。とくに卒業研究の指導体制は、一般教養教育および看護学の基盤教育を担当する人間科学講座の教員と看護学の専門講座の教員が互いに連携し合って研究指導にあたり、科学的根拠に基づいた看護実践ができる看護職を育成することを意図している。

4年間の教育の中で、最終学年である4年次は大学教育の総まとめの大切な時期であり、この時期に自律した看護職を目指す大学教育の成果を学生自らが検証できる機会をつくる必要があると考えている。その一つが**総合実習**である。看護学教育においては医療施設の協力を得て行う実習は重要な位置を占めている。4年次生の6月から7月にかけて実施される総合実習は、県内の医療・保健・福祉にかかわる約40の施設の中から学生自身が実習場所を選択し、一人ひとりの学生が総合実習の目的を実習施設の担当者と話し合って自ら作成し実習に取り組むものである。この総合実習は看護学を学ぶという動機付けを入学後の早い時期(1年次)に行う第1段階の実習(初期体験実習)から数えて第5段階目に行われる実習であり、大学教育で自律性が求められていることを学生自らが強く意識できるように位置づけている。

国際的な視野をもつ看護職の育成のために、本学では**ソウル大学との学生交流**を開学当初から実施している。これは単なる学生交流にとどまるのではなく、保健・医療体制や文化の違いがもたらす看護・保健の課題を自ら考える機会とすることを目的としている。さらに、カザフスタンやウズベキスタンなどの開発途上国の看護教育や保健活動システムの確立を支援するための活動も始めている。

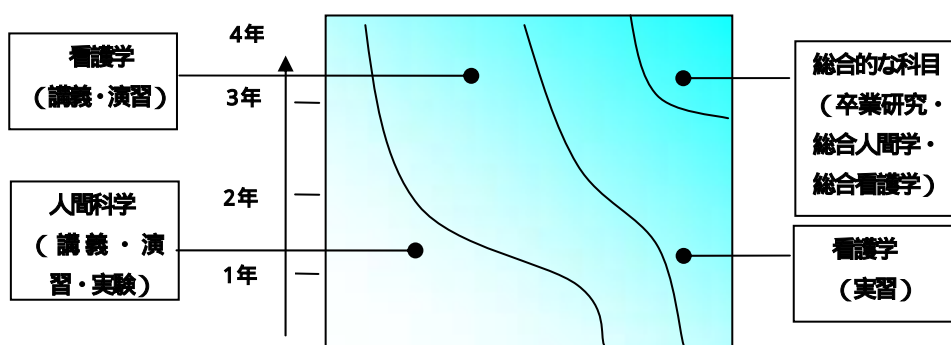


取組の概要

(2) 取り組みの内容について

一般教養教育、看護学の基盤教育、看護学の専門教育の融合

一般教養教育から看護学の専門教育まで密接な連携を図ることによって、科学的な基礎知識および専門知識、判断力、自律性を備えた学生の育成に取り組んでいる。人間科学講座の6研究室が中心となって進めている**自然科学の基礎**と**健康科学実験**、4年次で全ての教員が関わって行う**卒業研究**、**総合人間学**、**総合看護学**、**総合実習**は本学の独自の取り組みである。人間科学講座は、一般教養教育及び看護の基盤教育(図中の人間科学)を担当し、看護の対象となるヒト、人、人間を多面的、総合的に理解させることを目的としている。「自然科学の基礎」や「健康科学実験」を通して、看護学の基盤となる知識である自然科学の考え方を理解させ、実験を通して看護におけるサイエンスの必要性、人の健康や生命の尊さを認識できることを目指している。「卒業研究」では人間科学講座にも学生を配置して、人間科学講座の教員と看護専門講座の教員が互いに連携して研究指導にあたっている。このような指導体制により科学的根拠に基づいた看護実践(Evidence-Based-Nursing)ができる看護職を育成することができる。「総合人間学」では様々な分野で活躍している講師による講義を通して、幅広い見識や柔軟な考え方をもち、豊かな知性と感性を養うことができる。この講義は地域の人々にも公開している。「総合看護学」は看護の基盤教育と看護学の専門教育を融合したもので、学生は大学で学んだ基礎から専門にわたる全ての知識・技術を駆使して学習に取り組んでいる。

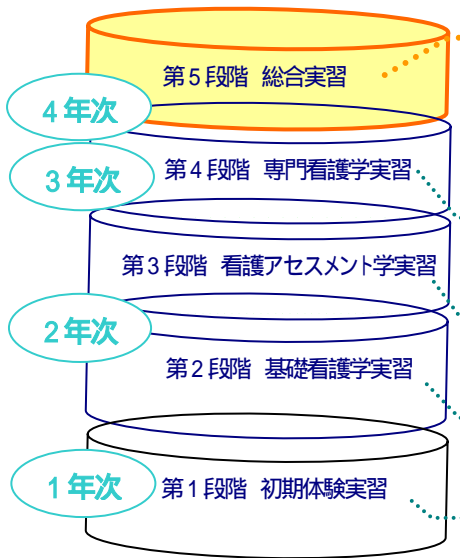


カリキュラムの構造

自律性を育成するための看護学の総合実習

看護学教育においては保健・医療施設で行う臨地実習が不可欠である。本学では、臨地実習を5段階に区分し、1年次から4年次までの4年間に配置している。4年次に行われる最終段階の実習を総合実習と位置づけ、学生が**自律性**をもって実習に臨むことを要求している。第4段階までの実習は、一つの施設(病棟)に4ないし5人の学生がグループで臨み、大学側が設定した実習目標をマニュアルにそって達成するものであるが、総合実習ではマニュアルは用意されておらず、実習施設の選択から、実習目標の設定、実習計画の立案までの全てをそれぞれの学生がそれまでの到達度等を考慮して行わなければならない。担当教員は、助言・指導が必要と判断された場合以外は施設に常駐しないことにしており、実習の進行管理を学生自身の責任で行わなければならない。必須科目の占める割合が圧倒的に多い看護教育の中で、学生の**個別性**を尊重し、自ら考えなければ到達できないこのような試みが、大学教育の意義を自覚し満足感を得る上で大きな役割を果たしている。

今後の課題としては、学生の多様なニーズに対応できるだけの実習施設のさらなる拡充、教員の指導力の強化、実習施設の指導者と教員との緊密な連携の強化などがあり、学生にとってより効果的な学習体験になるよう改善を図っていきたい。



病院、診療所、事業所、学校など県内約 40 施設 / 各学生が各自の選択した施設において、自ら設定した課題および実習計画に基づき、自主的かつ自律的な実習を行うことにより、看護観を深め、専門職としての今後の課題を明確にする

医療機関、保健所、市町村ほか / 成人、老人、小児、母性、精神、地域の各専門領域において、対象に応じた看護実践の方法を学ぶ

病院 / 患者の身体面、心理面、社会面を総合的にとらえ、健康問題を明らかにするプロセスを学ぶ

病院 / 入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態に応じた日常生活援助のあり方を学ぶ

病院、事業所など県内約 20 施設 / 社会の中での看護職の活動分野を幅広く体験し、看護の魅力を発見し今後の学習の動機付けをする

看護実習の概要と総合実習の位置づけ

国際的視野を育成するための国際交流

学生の国際的視野を育成し、国際看護活動にも自律的に参画できる能力を養成するために、開学以来、ソウル大学との「**学生交流プログラム**」を実行している。ソウル大学を学生交流校として選択した理由は、歴史的にも深いつながりのある隣国を理解する必要があること、韓国の看護学の大学教育はアメリカをモデルとしており、日本よりも早くから充実していることなどからである。長期滞在中の宿泊などハード面での本学の受け入れ体制をさらに充実させ、より深い交流が実現できるようにしていきたい。学生交流プログラムの1例を図に示す。

本年度から、**開発途上国（カザフスタン、ウズベキスタンなど）の看護教育、看護職の保健活動**のシステムを確立するために、大学院の学生も含めて活動を開始した。日本の看護学の大学教育の成果等の知的財産の移転に繋がることを期待している。

本年度からフォーラム形式の「**おおいた国際保健ネットワーク**」を学生自らが立ち上げ、教員、地域の看護職などが参加した勉強会を開始した。これは、本学への外国からの訪問客との交流、ソウル大学との学生交流プログラムを通して、学生自身が国際看護学などの教育や国際交流、国際協力活動の重要性を認識した結果であり、大学としても積極的にサポートしてゆきたい。



Program at a glance

DATE	TIME	STATIONS	CONTENTS
SEP	19:00	Arrival at Incheon International Airport (Incheon)	Arrival
SEP	22:00	Arrival at the hotel (near the University)	Arrival
SEP	09:00-10:00	Introduction to College of Nursing, OHSU	Academic Program
SEP	10:00-11:30	Introduction to Seoul National University Hospital	PT, MS, YU, ET, MS, YU, White coat
SEP	13:00-14:30	Visit to Seoul National University Hospital (Incheon Branch)	White coat
SEP	14:30-15:30	Visit to Gyeongju Korean Traditional House Village	White coat
SEP	17:30-17:45	Free time	
SEP	17:45	Dinner at the hotel (Incheon)	
SEP	18:30	Departure	
SEP	09:00-10:00	Visit to Gyeongju, Gyeongju Cultural Center	Academic
SEP	10:00-11:30	Meeting with Young, Han-Kook's Program Director	Academic
SEP	13:00-14:00	Lunch & Rest at Young, Han-Kook's Program Center	
SEP	14:00	Departure	
SEP	18:30	Meeting at Incheon Airport & Seoul National Airport	
SEP	09:00-10:00	Visit to Gyeongju, Gyeongju Cultural Center	Academic
SEP	10:00-11:30	Visit to Gyeongju, Gyeongju Cultural Center	Academic
SEP	13:00-14:00	Lunch & Rest at Young, Han-Kook's Program Center	
SEP	14:00	Departure	
SEP	09:00-10:00	Meeting with the President and Director of Nursing at OHSU	Academic
SEP	10:00-11:30	Meeting with the President and Director of Nursing at OHSU	Academic
SEP	13:00-14:00	Lunch & Rest at Young, Han-Kook's Program Center	
SEP	14:00	Departure	
SEP	09:00-10:00	Meeting with the President and Director of Nursing at OHSU	Academic
SEP	10:00-11:30	Meeting with the President and Director of Nursing at OHSU	Academic
SEP	13:00-14:00	Lunch & Rest at Young, Han-Kook's Program Center	
SEP	14:00	Departure	
SEP	09:00-10:00	Meeting with the President and Director of Nursing at OHSU	Academic
SEP	10:00-11:30	Meeting with the President and Director of Nursing at OHSU	Academic
SEP	13:00-14:00	Lunch & Rest at Young, Han-Kook's Program Center	
SEP	14:00	Departure	

Program schedule

2002年及び2003年の学生交流プログラム

(3) 組織的対応について

学生の教育に関する事柄を検討する組織を図に示す。全ての事柄は、最終的には教授会で決定することになっているが、詳細に議論し、迅速に決定する必要があるため、実際には、多くの事項の決定は、教授会の下に設けた各委員会および運営委員会の下に設けた各小委員会に委ねられ、教授会、運営委員会では報告して承認を得る形をとっている。

カリキュラムの改善や教育の進め方に関しては、月1回定期的に開催される**教育・実習小委員会**、**教務小委員会**において、学生の達成度などを判断しながら科目の配置、科目間での教育内容の過不足などを検討し、必要に応じて適宜、変更・改善している。教育・実習に関わる予算の執行も教育・実習小委員会が担当している。

看護学の実習の具体的な進め方についての検討は、助手も含めた看護系の全教員により構成された**看護系全体会議**で行っている。看護系全体会議は、月1回定期的に開催し、実習マニュアルの検討、学生の配置、指導教員の配置、オリエンテーションの進め方等を検討している。さらに、看護系全体会議を、教員同士の情報交換の場としても活用し、情報の公開性、大学運営の透明性を図る場としても役立てている。総合実習の実習施設は、前年度の評価を勘案して毎年検討しており、その開拓には、看護系講座の教員と人間科学講座の教員がペアあたり、学生のニーズに応えるようにしている。

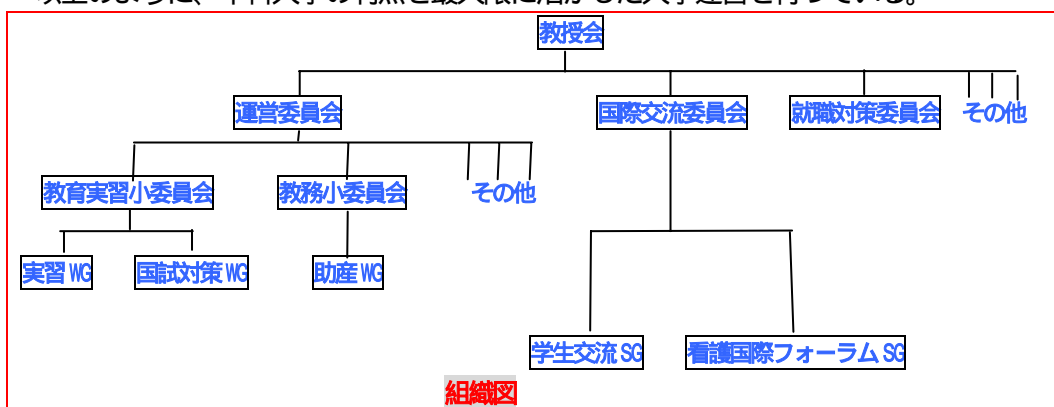
国際交流に関する検討は、**国際交流委員会**で行っている。国際交流、とくに学生の派遣に関わる費用は、「**国際交流費**」として予算化してある。学生交流に伴う、パーティーや文化交流（お茶会など）に関わる費用は後援会からの補助と教員、学生からのカンパで賄っている。

各委員会、小委員会にて企画・立案した事項をスムーズに実行するために必要に応じて**サポートグループ(SG)**を設置している。サポートグループは、教授以下全教員および職員がローテーションで係わるようにし、実務的な単純作業が一人の教職員に集中しないように配慮している。

教職員の一人ひとりが、大学運営、学生の人格形成に深く関わっていることを常に自覚するためには、情報の透明性、公開性が不可欠であると考えている。そこで、教授会、運営委員会、各委員会、各小委員会の全ての議事録は会議終了後、迅速に学内ウェブに載せていつでも全教員がアクセスできるようにしている。

大学運営にITを積極的に取り込むさまざまな努力を開学以来続けており、教育ばかりでなく、学生への情報伝達にも活用している。例えば、学生のほとんどが利用している携帯電話を通して休講情報が履修している学生にメールで伝達されるシステムや、最新の就職情報をデータベース化して学生が随時検索できるようにしている。

以上のように、単科大学の利点を最大限に活かした大学運営を行っている。



(4) 取組実績について

一般教養教育、看護学の基盤教育、看護学の専門教育の融合

自然科学の基礎に対する学生の評価としては「看護学を科学としてとらえるための基本を学ぶことができた」ことが上げられている。健康科学実験に対する学生の評価としては「講義で学んだ看護学の基盤教育を再確認することができ非常に役に立った」、「臨床検査で行われている検査手技や理論が理解できた」、「実験中は看護における基盤教育の必要性に気付かないまま実験を行っていたが、看護学の専門教育や実習を受けるに従って健康科学実験の必要性を認識するようになった」、「健康科学実験によって看護領域の幅の広さを認識した」などがある。健康科学実験を通して学んだ知識や技術は卒業研究、総合看護学にも活かされており、看護系の卒業研究のテーマの多様化、看護実践における総合的な判断力の育成にもつながっている。人間科学講座と看護専門講座との連携教育は看護実践をより科学的、客観的、理論的に展開する能力を養うことができるとの評価を看護系教員や地域の看護職からも受けている。日常の研究面でもお互いの講座の教員の研究テーマおよび研究手法の多様性を生み出し、大学としての研究機能にも大きな影響を与えている。人間教育の集大成としての総合人間学は、学生から高い評価を受けているだけでなく、地域住民にも大学の存在を認識してもらおう機会になっている。本学で実施しているサイエンスを基盤とした独創的な基礎教育を含めた多角的な看護教育は、総合的な判断力をもつ自律した看護職を育成するための教育モデルとなると考えている。

自律性を育成するための看護学の総合実習

画一的な実習マニュアルを用意しない総合実習を遂行するためには、実習施設の担当者、教員の負担は、他の実習に比べて大きい。しかし、多くの学生は、「目標や課題の設定など実習開始までにとっても時間がかかり大変だった。また、同じ施設に同級生や教師がいないという今までに経験のない条件で始めは心細く不安でいっぱいだったが、実習を終えるにあたり実習の全過程を自分で成し遂げたという達成感が込み上げてきた」、「今までの守られた環境での実習と違い、看護職者として働く心構えができた」などの感想を述べている。

学生は、この実習体験を通じて自律性が求められていることを強く自覚し、さらに、達成感や満足感を得るとともに、看護職として社会に出る際の自信にもつながっている。

また施設の担当者は「新鮮な実習であった」、「学生一人でスタッフ、患者と交渉して実習を組み立てていくことで、自主性、企画力を身に付けていくことは大切だと思った」などの評価をいただいている。多くの施設の協力を得て実習を実施することにより、大学を地域の医療機関や看護職に理解していただく機会になるとともに、大学の教育に対する評価・批判等を直接伺うことができ、最も身近で本音の聞ける第三者的な評価ではないかと考えている。

国際的視野を育成するための国際交流

ソウル大学との実質的な学生交流プログラムは、本年度で4回目を迎えた。両校の学生（それぞれ5～7人）が、10日から3週間、それぞれの大学に滞在し、授業に参加したり、学生同士のグループワークをしたり、実習施設を訪問したりして、お互いの国の看護学の大学教育を体験している。

本学ではこのプログラムを単なる学生交流としてではなく、自ら考え、行動することを

実践する最良の機会として捉えており、現に回を重ねる毎に、**学生が主体的に**プログラムを展開するようになってきた。また、**学生の国際的な視野**を深め、社会性を身につけることにも大きく役立っている。

交流学生としてソウル大学を訪問できる学生の人数は限られているが、交流の経験を共有する機会を設け、また、ソウル大学からの受け入れ準備及び実際の対応には全学として関わるようにし、お互いの国の文化や社会的な背景を理解する機会ともなっている。学生同士が、隣国である双方の国を、心から理解しようとする熱気が伝わってくる。

「**おおいた国際保健ネットワーク**」では、青年海外協力隊などの経験談が語られ、学生同士で、国際看護・保健活動に関する課題や問題点が積極的に議論され、これからの看護職が国際的視点を持つことの重要性を自ら認識し、その輪が広がりつつある。これをきっかけに、本年度から、夏休みを利用して本学の教員と学生を開発途上国（カザフスタン）の保健活動に1ヶ月ずつ派遣することとし、大学としての国際協力、国際交流のあり方をさらに検討していきたいと考えている。



ソウル大学学生とのグループワークの一例



本学の実習施設（助産院）の訪問